埋文とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2022.3.31
VOL. 158

小竹貝塚出土品（富山市呉羽）
《単式釣針（未成品、完形）》

ニホンジカの角でつくられた、釣針形の骨角器とその未成品（製作途中のもの）です。並べてみると、どのような工程で釣針を作成していたのかがよくわかります。小竹貝塚ではこのほかにも、磨製石斧や玦（けつ）状耳飾、貝輪など、さまざまな道具やアクセサリーが未成品とともに出土しており、ものづくりがさかんな様子がうかがえます。

とっておき埋文講座●ほ場整備事業の試掘調査
●ヒスイ勾玉の歴史と技術
Center Flash●催しガイド2022
古写真発掘！●吉峰遺跡　立山町吉峰野開

富山県埋蔵文化財センター

ほ場整備事業の試掘調査

―富山市・上市町の４遺跡を調査―

とっておき埋文講座①

はじめに

富山県内では先進的な農業経営のため、ほ場整備事業が進められています。ほ場整備では地盤を削ったり、盛土を行いますので、水田の下にある貴重な遺跡が壊されることも考えられます。こうしたことを避けるため、県教育委員会では、遺跡内を部分的に掘り、どのような遺構（住居や溝など）・遺物（土器や石器や木器など）があるのか、どんな時代であるのか、現在の地表からどのくらい下に遺跡があるのか等を知るため、試掘調査を行っています。

今年度調査を行ったのは、富山市の宮条南遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、上市町の東江上遺跡、東江上西三反田遺跡の４遺跡です。

これらの遺跡の中で、今回は東江上遺跡について紹介します。

東江上遺跡について

上市町の東江上に所在します。北陸自動車道の上市スマートインターチェンジのあたりにあり、北陸自動車道下も遺跡範囲ですので、皆さんも通ったことがあるかもしれません。

遺跡は上市川の扇状地、沖積平野に立地しています。現在、水田の高さは標高12～17mありますが、扇端近くですので、トレンチ（試掘溝）を掘っていくと、水が湧き出るところが多くありました。

過去の調査

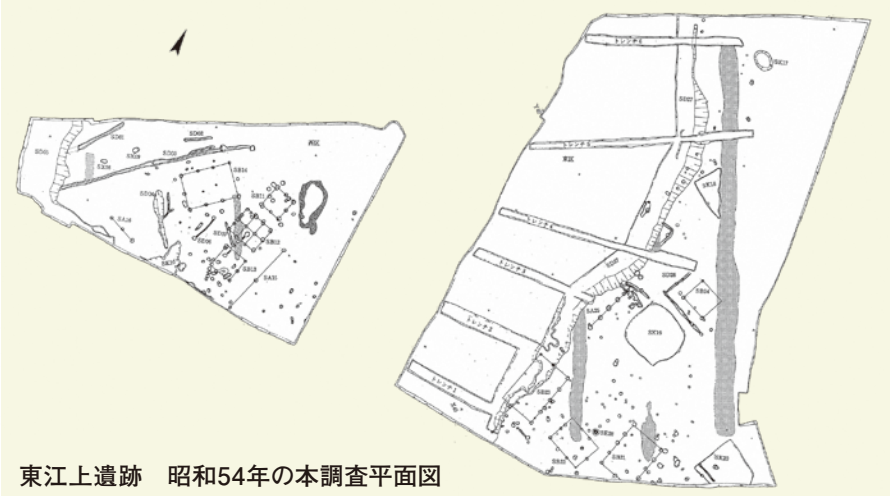
昭和54年に行われた、県教育委員会が協力した上市町教育委員会による北陸自動車道建設に先立つ本調査では、飛鳥時代の５棟の掘立柱建物、３棟の倉庫、１棟の竪穴住居が見つかっています。掘立柱建物は当時としては珍しい飛鳥時代の建物群として注目されました。また、倉庫とされる総柱の掘立柱建物の柱穴には、柱や礎板（そばん）が残っているものもありました。礎板の組み方は長い板を井桁（いげた）状にした珍しいタイプです。

３棟の掘立柱建物が規則的に配置されていることや倉庫があること、周囲を溝で画されていること、また、遺物では土師器や須恵器のほか、硯も出土していることなどから、このあたりを領域とする村落の長（里長クラス）の居住地と考えられました。

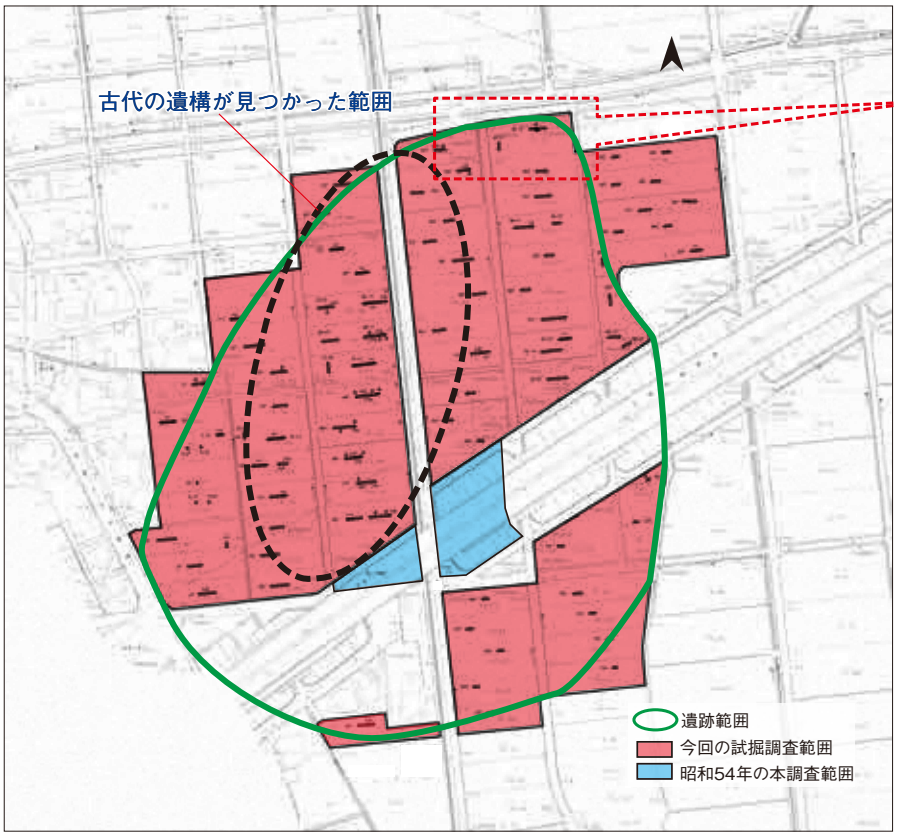
さらに中世の石組井戸も見つかっていることから、中世にも集落があったことがわかっています。

調査をした遺跡の位置

堀立柱建物



東江上遺跡　昭和54年の本調査平面図



東江上遺跡　遺跡範囲・調査範囲

今回の調査

今回の調査では、調査区の西側を中心に古代の土坑や溝が見つかりました。また、柱が残っている穴もあり、建物の柱穴と考えられます。

柱穴

これらのことから、昭和54年本調査時の集落の広がりが北側にも延びていることが確認できました。

新たに弥生時代～古墳時代を確認

調査区北端部分の溝からは、弥生時代末～古墳時代初めの土器がまとまって見つかりました。甕、壺、鉢、高杯、器台など様々な種類があること、残りがよい土器が多かったことから、祭祀が行われた可能性も考えられます。

土器出土状況

高杯

今回の成果により、正印新遺跡、江上Ａ遺跡など江上弥生遺跡群に東江上遺跡も加わり、遺跡群の範囲が東に広がることがわかりました。

地元の方の話では、小学生の時（50年ほど前でしょうか？）は土器がまとまって出土した地点の北側と東側は沼であったそうです。

弥生時代～古代でもここがやや高い土地で周囲は低く、水が汲める、水田にできるなどの利便性があったため、ここを選んで住んでいたのでしょう。

おわりに

今回調査した４遺跡、どこの遺跡からも立山連峰がとてもよく見えました。山々の景色は昔と変わっていません。弥生時代、古墳時代、古代、中世、どの時代でもここで集落を営んできた人々は、立山はきれいだなと見上げながら日々を過ごしていたに違いありません。

現場から見た夕方の立山連峰

（青山裕子）

ヒスイ勾玉の歴史と技術

とっておき埋文講座②

富山大学学術研究部人文科学系教授　髙橋　浩二

はじめに

勾玉とは、アルファベットのＣ字形に近く湾曲し、丸く膨らむ一端に紐を通す孔を開けた玉のことを言います。考古学的には、旧石器時代の末以降に見られる、動物の牙に孔を開けた垂飾が起源と考えられています。勾玉は、縄文時代になるとヒスイや滑石等さまざまな石で作られますが、形が定まっていません。大きく変化するのはこれ以降で、今回は弥生から古墳時代におけるヒスイ勾玉の変遷と製作技術に焦点をあてて話をしたいと思います。

弥生時代のヒスイ勾玉

Ｃ字形を呈する定形的なヒスイ勾玉が現れるのは弥生時代中期初頭ないし前期末頃で、これを「定形勾玉」と呼びます。定形勾玉には紐孔にむかって３本程の刻みを入れたものがあり、「丁字頭勾玉」と言います。これらは北部九州を中心に分布します。少し遅れて中期前葉からは、北陸でもヒスイ製の「半玦形勾玉」が作られます。ヒスイ製には他に、縄文系の「櫛形勾玉」や「緒締形勾玉」などがありますが、弥生時代終末期以後には急速に衰退し、ヒスイ定形勾玉（丁字頭勾玉含む）に淘汰されていきます。

半玦形勾玉を作る過程では、ヒスイを小さく割り取る際に「施溝分割技法」が用いられます。紅簾片岩製の石鋸を使いヒスイに幅5㎜程の溝を付け、ここに合わせて強く打撃し割り取ります。打割面には平坦面が作られ、ヒスイ勾玉の形に活かされます。碧玉や硬質緑色凝灰岩製の管玉製作にもこの技術が用いられました。これは縄文時代にはなかった技術です。このように、施溝分割技法を用いることで、規格的な大きさや形状の半玦形勾玉を作ることが可能になりました。定形勾玉の製作にもこの技術が用いられたと考えられています（河村 2010）。

弥生時代のヒスイ勾玉には、縄文時代と違って、緑色透明なものが数多く認められます。私は、施溝分割技法のもう一つの効果として、ヒスイの緑色透明な部分を効率的に割り取ることが可能になったということに注目しています。

ヒスイ定形勾玉の保有の意義

弥生時代には、人々の間に階層差が顕著に見られるようになります。それぞれの地域の中で、首長や上位階層の析出が一段とすすみ、北部九州では弥生時代中期ないし前期末以後、その階層差を表現する方法として、漢王朝から下賜された銅鏡やガラス璧、青銅製や鉄製の武器（剣、矛、戈）とともに、装身具の勾玉も利用されるようになりました。勾玉の材質ではガラス製が最もランクが高く、次いでヒスイ製、その次が緑色石材製、一番下位が粘土製となります。形では丁字頭や定形勾玉が最も高く、次いで亜定形や半玦形勾玉、縄文系勾玉になると考えられています（木下 2011）。

良質のヒスイが定量的に採取できる所は、新潟県の糸魚川原産地に限定されます。また、ガラスも日本列島外からの供給に依存していました。したがって、ガラスやヒスイ製の定形勾玉は流通量が少ない貴重品であったわけです。それゆえに、原産地から遠く離れた地では、一般民まで広く行き渡るものではなく、首長や上位階層によって流通量が管理されるものでした。縄文時代のヒスイ勾玉とは形や製作技術も違うし、また用いられ方やそこに込められた意味も異なっています。

なお、弥生時代のヒスイ勾玉については以前に一度扱ったことがありますので、『埋文とやま』vol.130（2015年3月発行）を参照してください。

古墳時代前期のヒスイ勾玉

ここからは古墳副葬品の発掘例が多い近畿地方、とくに畿内を中心に見ていきます。弥生時代終末期の京都府芝ヶ原12号では緑色透明のヒスイ勾玉８点とともに、多数の碧玉または緑色凝灰岩製の管玉と青色系のガラス小玉という３種類がセットで出ています。

表１　近畿地方を中心とする主な弥生墳丘墓・古墳出土の玉類と副葬品の変化

古墳名	所在地	墳形	規模	時期	玉類			鏡	鉄製武器	腕輪形石製品
					ヒスイ勾玉	碧玉管玉	ガラス小玉			
芝ヶ原12号	京都府城陽市	前方後方	―	弥生終末期	◎	◎	◎	○	×	
ホケノ山	奈良県桜井市	前方後円	約80	弥生終末期／古墳早期	×	×	×	○	◎	×
園部黒田①	京都府園部町	前方後円	52	弥生終末期／古墳早期	×	○	×	○	◎	×
綾部山39号	兵庫県御津町	円	10～15	弥生終末期／古墳早期	×	○	×	○	×	×
矢藤治山	岡山県岡山市	前方後円	35.5	弥生終末期／古墳早期	○	×	◎	○	×	×
中山大塚※	奈良県天理市	前方後円	132	古墳前期1期	×	×	×	○	○	×
大田南5号①	京都府峰山町	方	19	古墳前期1期	×	×	×	○	○	×
黒塚	奈良県天理市	前方後円	約130	古墳前期2期	×	×	×	◎	◎	×
西求女塚	兵庫県神戸市	前方後方		古墳前期2期	×	×	×	◎	◎	×
権現山51号	兵庫県御津町	前方後方	42.7	古墳前期2期	×	×	◎	◎	◎	×
吉島※	兵庫県新宮町	前方後円	約30	古墳前期2期	×	×	◎	○	?	?
安満宮山	大阪府高槻市	方	21	古墳前期2期	×	×	◎	◎	○	×
神原神社	島根県加茂町	方	約30	古墳前期2期	×	×	×	○	◎	×
椿井大塚山	京都府山城町	前方後円	約200	古墳前期2期	×	×	×	◎	◎	×
元稲荷※	京都府向日市	前方後方	84	古墳前期2期	×	×	×	×	○	×
花野谷1号	福井県福井市	円	18	古墳前期1～2期	○	○	◎	○	○	×
神谷内12号※	石川県金沢市	前方後円	27.5	古墳前期1～2期	×	○	×	○	×	×
神谷内17号	石川県金沢市	方	12	古墳前期2期	○	×	○	×	○	×
国分尼塚1号	石川県七尾市	前方後方	52.5	古墳前期2期	○	○	×	○	◎	×
森尾	兵庫県豊岡市	方	35	古墳前期2期	×	○	○	○	○	×
雪野山	滋賀県八日市市	前方後円	70	古墳前期2～3期	×	○	○	◎	◎	○
桜井茶臼山※	奈良県桜井市	前方後円	約195	古墳前期2～3期	○	○	○	◎	◎	◎
下池山	奈良県天理市	前方後方	約125	古墳前期3期	○	○	○	○	○	○
鴨都波	奈良県御所市	方	19	古墳前期3期	◎	○	○	◎	◎	○
メスリ山①※	奈良県桜井市	前方後円	約235	古墳前期3期	◎	◎	×	○	◎	◎
紫金山	大阪府高槻市	前方後円	110	古墳前期3期	○	○	×	◎	◎	◎
松岳山※	大阪府柏原市	前方後円	約150	古墳前期3期	○	○	○	○	○	◎
園部垣内	京都府園部町	前方後円	約82	古墳前期3期	○	◎	×	○	◎	◎
雨の宮1号	石川県中能登町	前方後方	64	古墳前期3～4期	×	○	×	○	◎	◎
新沢500号	奈良県橿原市	前方後円	62	古墳前期3～4期	○	◎	◎	◎	◎	◎
東大寺山	奈良県天理市	前方後円	約130	古墳前期4期	◎	○	×	×	◎	◎
白水瓢塚	兵庫県神戸市	前方後円	56	古墳前期4期	◎	◎	◎	○	○	◎

埋葬施設が複数の場合は、埋葬施設名を①～③として表す。　※は盗掘を受けている古墳を表す

しかし、同じ終末期でも奈良県ホケノ山では玉類が全く出土していません。同時期の京都府園部黒田と兵庫県綾部山39号では管玉だけ、岡山県矢藤治山ではヒスイ勾玉とガラス小玉だけというように、一部の玉が欠落して、3種類がセットで揃わなくなります。

また、古墳時代前期前半(前期1～2期)には、大量の三角縁神獣鏡が出土した奈良県黒塚古墳や京都府椿井大塚山古墳、兵庫県西求女塚古墳、同県権現山51号墳、大阪府安満宮山古墳などでもヒスイ勾玉は見つかっていません。この段階には畿内から離れた一部の地域で3種類がセットで揃う古墳もありますが(福井県花野谷1号墳など)、畿内の主要な古墳では、不思議とヒスイ勾玉を含む3種セットが副葬されなくなってしまうのです。

畿内でヒスイ勾玉を含む3種セットが再び副葬されるのは、奈良県桜井茶臼山古墳の段階からです。3種セットが揃う同県下池山古墳や新沢500号墳、また一部欠落しますが同県メスリ山古墳や東大寺山古墳、大阪府紫金山古墳などのように、前期後半(前期3～4期)には畿内の主な古墳で、ヒスイ勾玉の副葬例が多くなっていきます。

再びヒスイ勾玉が副葬されるようになる背景を考えてみましょう。桜井茶臼山古墳からは、腕輪形石製品の副葬が開始されます。腕輪形石製品は鍬形石、車輪石、石釧の総称で、弥生時代に南西諸島で採れる南海産のゴホウラ貝やオオツタノハ貝、イモガイで作りはじめた貝輪を祖型にして、古墳時代に入り碧玉や緑色凝灰岩などの石材で製作するようになったものです。碧玉の原産地は石川県小松市などで見つかっていて、同県片山津玉造遺跡は、腕輪形石製品の製作遺跡として全国的に知られています。鍬形石、車輪石、石釧の出土分布を見ていくと、畿内を中心にし、ここから離れるにしたがって分布が疎らになります。このことから、倭王権から地方勢力へ地位承認の証として分与されたものと考えられています。富山県では国史跡の高岡市桜谷2号墳から石釧5点が出土しています。

このように腕輪形石製品は、倭王権と強い関係をもつ副葬品であることが分かります。そして、同時期にヒスイ勾玉が突如再び副葬されるようになることについても関連して考えた方がよいのではないか、つまり背景としては倭王権による管理があったのではないかと考えています。

図1　ヒスイ勾玉と玉類の変遷

大阪府立近つ飛鳥博物館2003『黄泉のアクセサリー ― 古墳時代の装身具 ―』
財団法人飛鳥保存財団1980『高松塚壁画館開設』
奈良県立橿原考古学研究所2006『海を越えたはるかな交流 ― 橿原の古墳と渡来人 ―』
奈良県立橿原考古学研究所2007『金の輝き、ガラスの煌めき ― 藤ノ木古墳の全貌 ―』
毎日新聞社2004『特別展 翡翠展 東洋の至宝』
町田章1997『日本の美術』第371号古墳時代の装身具　至文堂

古墳時代中期以後のヒスイ勾玉

大阪府豊中大塚古墳や兵庫県宮山古墳など古墳時代中期の古墳に副葬された勾玉を見ると、暗緑色の碧玉製や淡緑色の緑色凝灰岩製、薄茶色の瑪瑙製、白色透明な水晶製などが加わり、実に色とりどりになります。また、中期からは滑石製の勾玉も急激に増加していきます。弥生時代から古墳時代前期前半の勾玉が、ヒスイ製や少数のガラス製に限られていたこととは非常に対照的です。勾玉の材質の多様化は、実は古墳時代前期後半にはじまっていますが、中期からはその傾向がとくに顕著になります。また、中期後半頃からは、宮山古墳出土品のように、金や銀、金銅製の耳飾や指輪、冠などの装身具も出現します。

古墳時代前期までは緑色透明部分が多いヒスイ勾玉が数多く認められましたが、中期以後には白色不透明なものが目立つようになります。福井県天神山7号墳では5点の勾玉が出土しています。大型の2点は一見、緑色透明でヒスイ勾玉に見えますが、実はガラス製で、白色不透明な3点の方がヒスイ勾玉です。弥生時代から古墳時代前期前半の勾玉といえば、緑色透明なヒスイ製がほとんどを占めています。しかし、中期以後は勾玉の材質や色調が多様化する中で、緑色透明なヒスイ勾玉へのこだわりが低下してしまったかのようです。

ヒスイ勾玉は古墳時代前期に断絶期があったものの、以降は継続して副葬品に利用されてきましたが、古墳時代後期には減少していきます。また、ガラス製の玉は色調がとても多彩化しています。古墳時代前期までは青色系統がほとんどでしたが、この段階には緑色や黄色、橙色などのものが増えています。福井県十善の森古墳出土の玉類を見ると、緑色透明な勾玉は全てガラス製で、ヒスイ製は1点も含まれていません。ガラス製の玉では、他にも青色や紺色、緑色の地文に黄色の小玉が斑点状に入るトンボ玉と呼ばれるものが多数認められます。

有名な奈良県高松塚古墳からもガラス小玉などは多数出土していますが、ヒスイ勾玉は見られません。6世紀末に日本で最初に建立された寺院の同県飛鳥寺からは、塔心礎の埋納品としてヒスイ勾玉が2点出土しています。1点は緑色透明な丁字頭勾玉で、弥生時代から古墳時代前期に多く見られる古いタイプ、他方は白色不透明なもので古墳時代中期以後に増えてくる新しいタ

イプです。後述のようにこの時期にはヒスイ勾玉はもう作られていませんので、両方とも100年以上の時を伝世してこの場所に埋納されたことになります。

そして、東大寺三月堂の不空羂索菩薩の宝冠に付けられたものを最後にして、ヒスイ勾玉は日本の歴史の中から消えてしまいます。

富山県朝日町浜山玉つくり遺跡

次からはヒスイ勾玉の製作遺跡について見ていきましょう。ヒスイ製玉類の生産が日本で初めて考古学的に実証されたのが、1967～68年に発掘された浜山玉つくり遺跡です。それまでは国外からヒスイ製品がもたらされたと考えられていました。古墳時代中期後半頃の遺跡で、いま県史跡になっています。ここでは、ヒスイを分割する際に「浜山技法」と呼ばれる技術が用いられています。浜山技法は石目に沿ってヒスイに敲打を巡らしながら割り取る技術です。他にも縦方向に打ち割る方法が用いられています。弥生時代のヒスイ勾玉に用いられた施溝分割技法は浜山玉つくり遺跡では使われていませんので、ヒスイの分割技術が大きく変わっているのが分かります。

糸魚川周辺地域の玉作遺跡の変化

ヒスイ原産地を擁する糸魚川周辺地域における玉作遺跡の様相を表にまとめました。後生山遺跡（弥生時代後期）や姫御前遺跡（古墳時代前期前半を中心とする時期）ではヒスイの施溝分割品が出土しています。また、緑色凝灰岩製管玉が作られる一方、滑石製玉類の製作は低調です。

横マクリ遺跡（古墳時代前期後葉）から大角地遺跡（古墳時代中期前半～中頃）ではヒスイの施溝分割品が一部の遺跡でしか確認できなくなり、施溝分割技法が衰退していることが考えられます。また、緑色凝灰岩製管玉の製作は低調傾向で、大角地遺跡では臼玉製作に変わっています。一方、滑石製玉類の製作は盛んになります。

図2　浜山技法が施されたヒスイ

中期後半の浜山玉つくり遺跡や田伏遺跡の段階になると、ヒスイの施溝分割品は認められず、緑色凝灰岩製管玉も製作されていません。このように、弥生時代の分割技法で、古墳時代に入ってからもわずかですが認められてきたヒスイへの施溝分割技法の使用は完全になくなります。古墳副葬品に白色不透明のヒスイ勾玉が増えるのは、こうしたヒスイの分割技術の変化に起因する可能性が考えられます。さらに、弥生時代以来続いてきた緑色凝灰岩製管玉の製作も終了します。対照的に、滑石製玉類の製作が主体へと変化しています。そして、中期後半～中期末頃の田伏遺跡を最後に、この地域での玉類の製作は終焉をむかえます。

奈良県曽我遺跡

古墳時代中期には曽我遺跡でも玉作りが始まり、中期後半から後期にかけてピークをむかえます。出雲の碧玉、北陸の緑色凝灰岩、紀伊の滑石、久慈や銚子の琥珀のように全国から玉の素材が集められ、多種多様な玉類が大量に生産され、そして完成品が各地の遺跡へ運ばれていきます。遠方の各地から玉の素材を集め、大量生産した背景には倭王権の関与が推定できます。

出土数を見ると、滑石は約579万点で1745kg（全体量の64%）、碧玉は約165万点で713kg（同26%）と大量なのに対し、ヒスイは133点で150g（同0.006%）しか出土していません。古墳副葬玉類のところで、後期にはヒスイ勾玉が減少していることを説明しましたが、そのことが生産の面からも裏付けられます。このようにヒスイ勾玉の製作は、やがて終了してしまうのです。

おわりに

一口にヒスイ勾玉と言っても、時代や地域によって形や大きさ、色調や質感も違うし、用いられている技術も変わっていきます。さらには、用いられ方や完成品に込められた意味もさまざまです。実際に展示品を見て比較しながら、細部の違いや、共伴する玉類の組合せの差がどのようなことを表すのかなど、この講座を機会に考えていただけるようになれば幸いです。

（令和3年10月31日
第3回　県民考古学講座）

【参考文献】

・河村好光2010『倭の玉器ー玉つくりと倭国の時代』青木書店
・木下尚子2011「装身具」『講座 日本の考古学』6弥生時代（下）、青木書店
・古代歴史文化協議会編2018『玉ー古代を彩る至宝ー』ハーベスト出版など

表2　糸魚川周辺地域における玉類製作の様相の変化

遺跡名	時期	ヒスイ製品・未製品・原石などの出土数	ヒスイ製施溝分割品	緑色凝灰岩製管玉製作	滑石製玉類製作
後生山遺跡	弥生時代後期	原石、荒割品	1点	△	△
姫御前遺跡Ⅱ	古墳前期前半を中心とする時期	半月形品2、原石・剝片106	1点	○	△
姫御前遺跡Ⅰ	古墳前期後半を中心とする時期	原石9、剝片7、敲石1	×	△	○
横マクリ遺跡	古墳前期後葉	原石3、剝片2	1点	△	○
南押上遺跡	古墳前期中葉～前期後葉	勾玉7、研磨～穿孔130、荒割～形割33、原石61	×	○	○
笛吹田遺跡	古墳時代前期～中期	荒割品・剝片・原石36以上	△	○	○
大角地遺跡	古墳中期前半～中期中頃	荒割品・剝片・原石22	1点	△*	○
浜山遺跡	古墳中期後半	勾玉・平玉未製品各1、原石・剝片など174	×	×	◎
田伏遺跡	古墳中期後半～中期末頃	荒割品・剝片12、原石13	×	×	◎

＊緑色凝灰岩製臼玉状未製品

Center Flash

催しガイド 2022

展示室

企画展

「見て、知って! とやまヒストリー2022」令和4年4月15日(金)～9月25日(日)

富山県の旧石器時代から近現代までの通史について、県内各地で発掘調査された出土品を通して分かりやすく紹介します。
展示を見て楽しく歴史を学びましょう。社会科の学習にもご活用ください。

接合資料【直坂Ⅰ遺跡】

特別展

「富山の古墳時代(予定)」令和4年10月7日(金)～令和5年1月26日(木)

富山県の古墳時代の出土品を展示する予定です。
(都合により内容が変更になる場合があります。)

古墳埋葬品【板屋谷内古墳】

ミニ企画

「市町村連携発掘速報展」「春の虫千会(むしぼしえ) －重要文化財の風通し－」
令和5年2月4日(土)～4月2日(日)

県内で近年実施した発掘調査の出土品や研究成果を展示します。
また、当センターが所蔵する国重要文化財「富山県境A遺跡出土品」や登録有形文化財などの定期点検を兼ねて、風通しの様子を公開します

縄文土器【境A遺跡】

収蔵展示室

常設展示

「小竹貝塚展」令和4年4月15日(金)～令和5年4月2日(日)

日本海側最大級の貝塚であり、91体の埋葬人骨が出土した小竹貝塚の出土品を展示しています。併せて、平成30年度から開始した「小竹貝塚調査研究プロジェクト」の最新成果を展示し、より興味をもっていただきます。

骨角器(小竹貝塚)

富山ヒストリーチャレンジアップ事業

■ 県民考古学講座

考古学の入門編から近年の発掘調査成果まで、当センター職員を中心に著名な講師を迎え、分かりやすく解説する講座です。令和4年度は、7月より全6回の開催を予定しています。

■ 出前授業・出前埋文センター

学校や地域の施設に本物の出土品を持参して、地域の遺跡や歴史について解説したり、火起しやまが玉づくりの活動を体験したりします。詳細は、お問い合せください。

■ 体験教室の開催

おとなも体験できる考古学体験教室を開催します。
※詳細は、HP等でお知らせします。
- **開催日　通年(12回程度開催)**
- **定　員　各回20名程度**
- **対　象　小学生～成人**

■ ワクワク体験教室

親子で楽しく学ぶ考古学教室です。まが玉づくりやガラス玉づくりなどの古代体験を通して、先人の知恵や技を習得します。
- **開催日　7月下旬～8月下旬**
  ※詳細は6月に小学校に配布するチラシでお知らせします。
- **対　象　小学校4～6年生とその保護者**

■ こども考古学講座

小学生を対象とした考古学講座の開催
- **開催日　夏休み期間中(3回開催)**
- **対　象　小学校4～6年生**

■ 考古学少年団

ちょっと専門的に、とやまの古代について学ぶ講座です。
- **開催日　通年(8～12回程度開催)**
- **対　象　小学校6年生～中学校3年生**

※こども考古学講座・考古学少年団についての詳細は、チラシやHPでお知らせします。

古写真発掘！―《12》

吉峰（よしみね）遺跡

昭和49年（1974年）撮影　　立山町吉峰野開

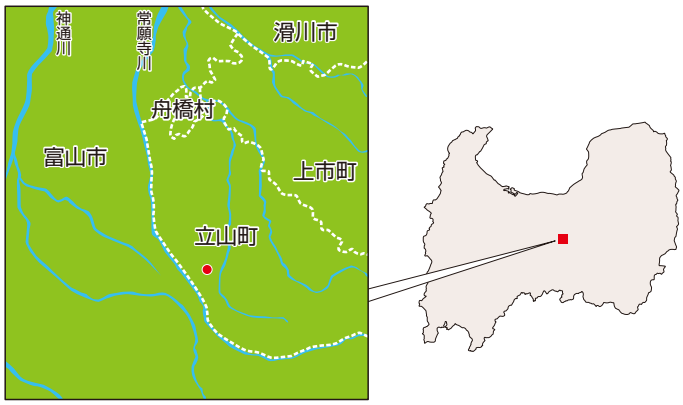
吉峰遺跡は、常願寺川で形成された標高約210～230mの河岸段丘上にあります。

この地で土砂採取が行われることとなり、昭和48･49年（1973･1974年）に発掘調査が実施されました。

調査の結果、遺構では縄文時代前期と中期初頭の住居跡や多くの穴が検出され、遺物では旧石器、縄文時代早期から中期の土器や石器が多く出土しました。出土品の中には、珍しい箆状垂飾（へらじょうすいしょく）もあります。

上の写真は、調査区の全景を北から撮影したものです。下の写真は、住居跡を発掘しているところですが、住居跡の向こうは崖状になっており、すぐ側まで土取りが進んでいるのがわかります。当時は、開発工事の進行と調査が切迫したギリギリの状況で行われる調査ばかりでした。そのような中でも、熱意ある調査担当者により決行された調査の成果として、郷土の貴重な考古資料を皆さんに御覧いただくことができています。

※現在は「立山グリーンパーク吉峰」として親しまれています。



出土土器（中期）

箆状垂飾（前期）

編集後記

当センターでは現在、4月から開催される企画展に向けて準備を進めています。新型コロナウイルス感染症が一日も早く落ち着いて、様々な展示や催しで皆さんに楽しんで頂ける時間が増えることを願っています。ご来館をお待ちしています。

（担当　善徳）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.158

令和4年3月31日発行　編集／富山県埋蔵文化財センター　〒930-0115　富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814

URL https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

富山県